

## 「越境」と「戦争の記憶」の理論的交点

—戦禍の現代的表象を読み解くために—

宮田 文久

日本大学大学院総合社会情報研究科

## Theorizing the Interface between Border Crossing and War Memories

—Cultural Representations of the Aftermath of War—

MIYATA Fumihisa

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

In this thesis, I will discuss how the discourses of border crossing and war memories interface. First, I will examine the discourse of border-crossing literature and the concept of being “in between.” Second, I will examine the discourse of war memories today in the era of “new wars.” In conclusion, I maintain that cultural representations of the aftermath of wars in our time are made possible by individuals who have internalized border-crossing and are able to refer to both individual and collective memories.

---

### 1.はじめに

本稿は、「越境」ならびに「戦争の記憶」の表象の間に、個人性と共同体性の関係という共通項を見出し、現在別個に論じられがちな「越境」と「戦争の記憶」の文芸表象における交点を描出する。筆者は2001年から2011年まで、すなわち21世紀初頭の10年間における表象を考察し続けているが、グローバル化以降、＜9・11＞やイラク戦争といった「新しい戦争」について更新され続ける「戦争の記憶」が表象される際も、あるいは過去の「戦争の記憶」についての表象がなされる場合も、ある共同体の価値観に基づいて個人が表出するものではなく、常に文化横断的な状況において現出していると考えている。本稿においては、表象を創出し享受する主体を「個人性」という語で、そうした主体が依拠している文化や記憶、使用言語を共有していると一般的に考えられている集団性を「共同体性」の語において考察するが、「越境」と「戦争の記憶」をめぐる表象では、共同体性そのものが混然とした現状において、表象を司る個人がその共同体性と対話を行い、換骨奪胎しながら、時に「リソース」として利用し、時に距離を置いている、といった自由度の高いモデ

ルを見出すことができる。本稿では、こうした表象を読み解くべく、これまで積極的にその接点が論じられていなかった「越境」と「戦争の記憶」を統括的に議論するための理論的素地を準備する。

「越境」という表象については、90年代初頭にリービ英雄が提唱した意味に基づいて議論を進める。リービ英雄は「越境」を「狭間」に立つこととしたが、その後、日本国内でこの言説が流布するにあたっては、旧来の比較文学的視座——逆説的に境界を強化しながら、異なる文化をまたいで創出される表象を考える、つまりは共同体性を基礎にする議論に終始してしまっている。そこでは「越境」は物理的な移動や複数言語使用を条件とした「特殊性」によって限定されてしまっており、リービが当初述べたような、境界そのものである「狭間」に立つ普遍的な個人性については議論がされていない。本稿においては、ポストコロニアル文学をめぐる議論などを参照しながら、「越境」の可能性を再検討する。

一方で、「戦争の記憶」は、世界的に見れば「記憶」ブーム、日本国内では阪神淡路大震災における「記憶」の議論を継承するタイミングで訪れた戦後50周年の「記憶」語り以降、内外において論議が喧し

い。同時に「新しい戦争」と呼ばれる事象が絶えず発生し、そこでまた新たな「記憶」語りが生まれ、同時に過去の「記憶」が参照されるという入れ子構造が発現している。現代日本に限ってみれば、吉見俊哉[2009]のいう「ポスト戦後社会」が考察され始めている一方で、作家の目取真俊[2005]が「沖縄『戦後』ゼロ年」を主張しているといった、「戦後」をめぐるパラドクスも顕在化している。こういった中で絶えず議論の参照にされてきたのが、アルヴァックス[1950=1989]の「集合的記憶」という概念である。これは、他者から切り離された個人を対象にして考察されてきた心理学的側面から「記憶」を切り離し、共同体性の中で相互関係において醸成され、また回帰する「記憶」を考える上で、非常に有用な概念であった。しかしその有用性ゆえに、「集合的記憶」は逆説的ながら、その共同体性が過度に強調されてきたと考えられる。そもそもアルヴァックス自身は記憶の個人性にも言及していたのだが、共同体性との間で「記憶」を紡ぐ個人性という側面は、後景に退き続けてきた。さらに言えば、たとえ人が一所に居るとしても、グローバリゼーション以降の文化的存在として、個人性は一つの共同体性との関係でのみ切り結ばれているわけではない。常に多種多様な文化・情報に晒され続けている個人性を鑑みれば、「集合的記憶」を考える際にも、共同体性の反映として個人が「記憶」を醸成し、反復するという側面だけでなく、むしろ無数に散らばる「集合的記憶」を適宜取捨選択する——まさに「狭間」に立つ個人性を中心に据えたモデルが考えられていい。社会学者の野上元[2007]は「集合的記憶」の概念としての「弱さ」(45)に逆説的な可能性を見出しているが、筆者も、相反するベクトルを含みこむ「集合的記憶」を、「越境」との関連において議論すべきだと考える。

こうした議論は、日本の私たちをとりまく境界と、災厄の記憶を日常的に考え続けなければならない東日本大震災以降においてこそ意義がある。2013年に上演され、今年、第58回岸田國士戯曲賞を受賞した戯曲『ブルーシート』は、飴屋法水が福島県立いわき総合高校の高校生と共に作り上げた作品である。戯曲終盤、登場人物／出演者である男子高校生が「こっから！ この場所から！ 逃げて！」と絶叫する

が、その彼の身体は「ランニングマン」と呼ばれる「走っている姿のようだが、体は、前に進んでいない」という動作を繰り返す(79-80)。このような表象を目の当たりにした際に私たち／観客は、自らを取り囲む無数の分断、そしてその状況そのものと密接に絡み合う災厄の「記憶」の様態に思いを馳せることとなる。本稿は、そうした表象を総合的に理解するための理論的言説である。

## 2. 「越境」における個人性と共同体性

### 2.1 リービ英雄による「越境」定義の意義

「越境」をめぐる論点から、個人性と共同体性の関係を検証する。前述したように、「越境」を条件付けているのは物理的な移動や、複数言語使用ではなく、個人的主体の普遍性であり、これによって共同体性を内破すると主張したい。具体的な表象で言えば、岡田利規がイラク空爆前夜の渋谷を舞台にした戯曲『三月の5日間』において、若者が扱う極度にルーズな現代口語によって規範的な日本語を脱臼させた果てに、渋谷を「いつもと違う特別な渋谷」(75)として現出させたような作品を念頭においている。渋谷／日本の外に出ることなく、複数言語使用においても、共同体性を乗り越えてしまうような個人の「越境」表象が実際になされている。

まずは、本論が依拠している、現代日本文学における「越境」概念の提唱者、リービ英雄による「越境」の定義を見てみよう。リービ英雄は、過去において亡命や植民地政策などによって故郷を捨て去らざるを得なかった数々の作家たちとは異なり、政治的な必然性はないままに、自由意志で母語を出て、いわゆるエクソフォニーの作家の一人として、「西洋出身者初の日本語作家」となった。彼はその作家としての活動初期、1993年に「越境」について以下のように発言している。

「越境」というのは、つまり、どこにも属さない、なにかとなにかの狭間にいる状態だということだ。しかし、その「越境」を文学の問題として考えると、その狭間にいる状態を絶望的にとらえるのではなく、むしろそのことによって、ふたつの文化を非常にアイロニカルにみるができる立

場にいる、と考えることができる。「越境」は小説の問題として、ふたつの文化を同時にみるという非常に活動的なアイロニーを意味しているのです。(239)

各文化に象徴される共同体性に対して、アイロニカルに距離をとることのできる個人性がここでは言明されている。その主体が物理的に「どこにも属さない」ことは現実的には不可能なはずであるが、にもかかわらず「なにかとなにかの狭間にいる状態」は可能だと述べられている。<sup>1</sup>

文学史的には、リービは「越境」の概念によって、それまでの亡命・移民文学や、ポストコロニアル文学といった表象をも統括的に取り込みながら、それらと自らの立ち位置を差異化していったといえる。日本では同時代的に、「越境」表象をめぐる、亡命・移民文学については後に沼野充義が『W 文学の世紀へ』[2001]および『亡命文学論』[2002]で、西成彦が『エクストラテリトリアル』[2008]で、ロシアや東欧の文学を中心に論じてきた。一方でポストコロニアル文学においては、主にクレオール文学を中心に、『クレオール主義』[原著 1991、増補版 2003]の今福龍太、『オムニフォン』[2005]の管啓次郎らが活発に言論活動を行ってきている。リービ英雄自身も、インド出身の作家サルマン・ラシュディからの影響を公言しており(1993、237-43)、日本国内について言えば、被差別部落の光景を「路地」として文学に大成させた中上健次の勧めで小説を書き始め、在日作家・李良枝とも交流を持っていた人物だ。遡れば、引き揚げてきた満州の光景を描いた安倍公房、アメリカへの移住経験から小説を紡いだ大庭みな子らへも積極的な評価を与えている(『日本語を書く部屋』[2001])。つまりは、上記したような議論と部分的な共有は保ちつつ、しかしそれらに「越境」という新たな位相を与えることで、政治的背景を携えての物理的な移動や、植民地という磁場の影響に基づいた

<sup>1</sup> リービ英雄のデビュー作『星条旗の聞こえない部屋』が英訳された際、訳者の Christopher D. Scott はイントロダクションにおいて、「越境文学」を“border-crossing literature”と訳出している(2001、x)。形容詞の crossborder などではなく、現在分詞の形容詞的用法において訳されていることは、「狭間」に立ち続けるというリービの「越境」の定義を正確に反映していると言える。

表象の系譜に連なりつつも、より普遍的な形において、「狭間」の様態をアップデートしてきたのである。

世界的に見れば、ポストコロニアル文学においては、ビル・アッシュクロフトら[1989=1998]が整理したように、4つのモデルにおいて「越境」をめぐる議論がなされてきた。①特定の国や地域の文化にみられる特色を強調する、「国家的／国民的(ナショナル)」あるいは地域的なモデル、②異なるいくつかの国々の文学性が共有する性質を、人種性を基礎としてあきらかにしようとする、「黒人文学」に代表されるモデル、③二つないしはそれ以上のポストコロニアル文学にまたがる特定の言語的・歴史的・文化的な特性を叙述すべく試みる、比較研究のモデル、④上記の③のモデルよりもさらに包括的な比較のモデルで、雑種性や混合性といった性質を、あらゆるポストコロニアル文学に共通の構成要素として論じようとするモデル、の4種類である(33)。④のモデルを論じる代表的な存在としては、「中間地帯」という概念を提唱するホミ・K・バーバ[1994=2005]が挙げられるわけであるが、ポストコロニアルな環境における雑種性や混合性に拠るその「中間地帯」を、リービ英雄の「越境」概念は、グローバリゼーション以降における普遍的な「狭間」へと更新させたと言ってもいいだろう。

こうして「越境」をめぐる言説が準備された結果として、多和田葉子、水村美苗といった同時代的な作家が「越境文学」の担い手として社会的な認知を得ていったのである。

## 2.2 「越境」に残された可能性

しかし、その後の「越境」をめぐる表象に関する考察においては、普遍的な「狭間」という観点は後景に退いてしまったようだ。たとえば、永岡杜人[2009]や笹沼俊暁[2011]らのリービ英雄論は、リービ英雄作品を私小説として作者自身に還元する側面が強く、越境者リービ英雄の普遍性が見えにくい。また「越境」研究の最新の成果とも言うべき論文集『バイリンガルな日本語文学』[2013]においても、リービ英雄世代の後を継ぐ温又柔といった作家たちも含めて、網羅的な議論がなされているが、個別のケーススタディー各作家・作品の並列的紹介・分析—に

留まってしまっている。問題は、彼ら「越境」表象の担い手たちの「特殊性」が強調され、彼らの他者性がネガティブに前景化されてしまうということだ。結果、「越境」の普遍的な可能性—物理的な「越境」経験を持たない人間においても、共同体性を脱構築していく個人性の確立は可能ということ—が置き去りにされてしまっているのである。

「越境」の普遍性については、多和田葉子が近年、作家・川上未映子との対話において実際に言及している。川上が話題に出した「狭間」という語を「存在しない場所」だとした多和田の説明は、リービのそれとほぼ同義である。そして、多和田の「場所があるところで書くとなると、結局、決まった課題を実行するだけになっちゃう」「だから、絶対にありえない場所に立つことの不可能性みたいなことかな」という言葉に対し、対話は以下のように続く。

川上 それは、身体を移動させて言語を変えて、試みることもできる一方で、やろうと思えば、日常的にも可能なことだとは思いませんか。

多和田 はい、たったひとつの町に住んでいても、ひとつの言語しか知らなくてもできることだと思いますよ。(150-51)

「狭間」に立つ個人的主体が「越境」の可能性を拡張する—物理的に移動しなくても、また複数言語使用者でなくとも、「越境」は可能だという見解は現れ始めている。

### 2.3 特殊性から普遍性へ

ただ、こういった議論が極度に相対主義的なものに陥ってしまう危険性はもちろんありうる。それは、多文化主義が陥りがちな、各「文化」の重要性を強調するのみとなってしまうネガティブなマルチカルチュアリズムの位相が、「越境」の表象をなす各個人の「特殊性」に横滑りしただけになってしまう恐れがあるのである。実際に母語の外に出る行為を「エクソフォニー」として言語的実験を繰り返す多和田にしても、言語をそれ自体の通常の規範からずらす—それは結果的には個人と共同体の関係をずらすことに繋がるものだが—ことを基本的な戦略とし

ているわけだが、多和田[2014]の「どこかに絶対の規則が存在すると仮定するより、すべてが常に運動の中にあると考えた方が言語とはつきあいやすい」(35)という言葉に象徴されるように、そのずらし方は個人の裁量如何ということにもなり、それらを読み解こうとする際も、結局は前述した個別のケーススタディ同様、彼らの「特殊性」を逆説的に強調し、際限のない相対主義的な位相への道を開いてしまうことにもなりかねない。リービ英雄は、肯定的に評価しつつも、ドイツに移住して日本語／ドイツ語の往還において書く多和田に対し、その歴史性の不在を指摘している。「ぼくは歴史を意識しながら、いままで文学を書いてきた。日米というものを背負ってるから、歴史から解放されることはできなかったんです。多和田さんはそれから逃れているから、ある意味でぼくより進んでる」(350)と述べている。

これは亡命文学やポストコロニアル文学との間で統合化／差異化を含みこんでいた「越境」表象において非常にクリティカルな問題である。政治的な背景を生い立ちにもつ作家たちを参照しつつ一線を画すリービにおいてさえも、アメリカから日本語文学に参入するにあたっては日米関係に基づいた政治性が尾を引いており、自在に日本語／ドイツ語を行き来する多和田はより自由に見えるのだ。長畑明利が、ポストコロニアルな背景をもつ韓国系アメリカ人アーティスト、テレサ・ハッキョン・チャのテキスト『ディクテ』を多和田の営為と比較する際に、多和田が「エクソフォニー」に感じている「愉悦」を指摘しつつ、『母語の外へ出る旅』はこのように愉悦に満ちた冒険であるとは限らない。(・・・)『ディクテ』の場合、母語の外に出るのは、当事者が出たくて出るのではなく、出ることを余儀なくされるだということである」(74)と述べているのは象徴的だ。ここには、脱政治的な自由を確保したかのように見える「越境」への違和感が表明されている。

以上のような問題点を踏まえてなお本稿では、「狭間」において共同体性から距離をとる個人の「越境」という普遍性を考えたい。「越境」を物理的な移動や複数言語使用を条件としたもの限定したり、歴史的必然性を持たない主体にとって不可能なものであると断じたりすることが、グローバリゼーション以

降において説得力を失いつつあることは前述した通りである。次節においては、このような「越境」的主体が「戦争の記憶」においても共同体性を脱構築していることについて言及していく。

### 3. 「戦争の記憶」における個人性と共同体性

#### 3.1 「戦争の記憶」をめぐる二つのベクトル

前節においては、「越境」という表象、ないし主体のあり方が、共同体性をアトランダムに脱構築する個人性という普遍性を獲得しつつある状況について議論してきた。本節では、そういった「越境」的主体が、「戦争の記憶」においても共同体性を転位させていることについて述べていく。

「戦争の記憶」を、共同体性とその都度関係性を切り結ぶ個人から考えるという観点は、決して突飛な論ではない。確かに「戦争の記憶」をめぐる言説は、アルヴァックスの「集合的記憶」に代表されるような、共同体性を基盤においた議論が主流となされてきた。アルヴァックス以降の「記憶の場」論で知られるノラ[1984=2002]は、「記憶」の議論を個人との関係で再考してはいるが、「全体的な記憶が私的な記憶へと細分化することで、想起せよという命令は内的な強制力をもつに至る。この細分化は、各個人に対して想起することを義務づけ、帰属の回復をアイデンティティの原則にし、またその神髄にする。この帰属は、今度はその個人自身を完全に拘束する」(43)として、共同体性＝「場」の重要性を指摘している。

一方、野上[2007]は、「戦争体験」から「戦争の記憶」への議論の変化を辿る中で「戦後社会において『戦争体験』とは、社会を構成する秩序と個人の『実感』が交換される重要な局所の一つであった」(52)としており、「戦争の記憶」論の基盤である「集合的記憶」について、「個人が参加と離脱を不断に繰り返すことができる、独特の実在性を帯びた存在」だと述べている(46)。共同体的記憶が前面に押し出された「戦争の記憶」論を個人の側から切り返して再考する契機が訪れているのである。

具体的な文芸表象としては、前述の『三月の5日間』同様、リービ英雄の『千々にくだけで』を挙げることができる。アメリカに旅客機で入国しようと

していた語り手／中心人物は、<9・11>の発生に伴い、カナダ国境で足止めされてしまう。機中で隣席だった日本人の老女によって第二次世界大戦時の「記憶」が挿入される。それは唐突ながら、語り手／中心人物の動揺を抑えるに十分な歴史参照である。文字通り「越境」と「戦争の記憶」の交点であり、「越境」的主体が形成されるプロセスでもある。

#### 3.2 「集合的記憶」論の再検討

周知の通り、「戦争の記憶」は、近年議論が喧しいテーマの一つである。2010年時点で、イスラエルの文化人類学・社会学者のエヤル・ベン・アリは、多くの社会がアイデンティティ危機の只中にあるなどといった理由により、世界的規模で「この20～30年間に記憶『ブーム』が起きている」とし、日本でもこの20年間に第二次世界大戦終結50周年を契機として記憶と戦争に関して多くの議論がなされているとしている(3-6)。日本国内に限ってみれば同様に金子淳も、「1990年代の『記憶論』ブーム」に関して、「1995年の阪神・淡路大震災での『震災の記憶』をめぐる議論、あるいは同年の戦後50年を機に活発化した『戦争の記憶』をめぐる議論」から、1995年を『記憶論』ブームのメルクマールだとしている(11)。共同体性の揺らぎという点から見て、「越境」表象の盛隆と同時代的な現象である点も重要だ。そして2015年に戦後70周年を迎え、「戦争の記憶」をめぐる言説の再検討も進むと考えられる。

このような「戦争の記憶」語りの中で、絶えず参照されてきたのが、アルヴァックスが提唱した「集合的記憶」である。アルヴァックスは「人が思い出すのは、自分を一つないし多くの集団の観点に身を置き、そして一つないし多くの集合的思考の流れの中に自分を置き直してみるという条件においてである」(19)としている。社会学者の浜日出夫[2005]は、この「集合的記憶」は心理学に代表されるような「個人主義的な記憶論」を批判するものだとしている。「集合的記憶」が「記憶が『心』の内部のどこかに保存されていて、自分だけがそれを再生することができる」という記憶のあり方へのアンチテーゼとして機能し、「想起の時点でその集団において利用可能な『記憶の枠組』を用いて過去を再構成」し、「想起

がなされるそれぞれの現在においてそのつど過去が作り出される」(8)という浜日出夫の主張は全面的に首肯できるものである。

だが本論において注目したいのは、浜日出夫が「個人的記憶にみえるものも、アルヴァックスによれば、実は多数の集合的記憶が交差する結果生み出された、いわば仮象にすぎないのである」(6)と述べている点だ。旧来的な越境の捉え方が共同体性と個人性を逆説的に強固に結びつけてしまっていたように、「集合的記憶」論も、個人において「多数の集合的記憶が交差する」点を看過してしまえば、社会学者・野上[2007]が述べるような『文化の政治学』分析のもっとも平板化した議論——「ある社会性によって記憶の共有と伝達が可能になることで『歴史』がかたちづくられ、それにより共同体性が定義され、同時に、その成員には帰属意識が植え付けられる」(44)という言説に終始してしまう危険性をも孕んでいる。

実際にアルヴァックス自身も「もし個人的記憶が彼の思い出のなにがしかを確認し、それらを明確にし、さらにそのいくつかの欠陥を補うために、集合的記憶に頼り、その内に身を置き、時にはそれと混じりあうことがあるとしても、個人的記憶はそれ独自の歩みをつづけ、この外部からの寄与分をすべて漸次その内容に同化し、合併するのである」(46)という、非常に微妙な物言いをしている。前述したように野上はここに「集合的記憶」論の「弱さ」と抱き合わせになった魅力を見出すわけであるが、同じく社会学者の片桐雅隆が提出している「リソースとしての歴史の参照」という議論が、まさにその「弱さ」自体の可能性を抉り出している。「われわれが歴史の共同性を言うとき、とりわけ注目したいのは、歴史記述の内容の共同化よりもむしろ、歴史が自己の物語の構築において参照されるという事態である」(145)と述べる片桐の「リソースとしての歴史の参照」という概念は、世界的に見ればロバート・イーグルストーンが『ホロコーストとポストモダン』において、個人における「同一化」と集団的な「同一性(アイデンティティ)」を区別し、ホロコースト以降の——さらにはエレン・ファインから援用するところの「ポスト記憶」の語りを分析していることと共に考えられるべきであろう。「記憶なきアイデンテ

ィティは空虚であり、アイデンティティなき記憶は無意味である」(105)と強調するイーグルストンの言説は、野上や片桐の議論と共に、「越境」をなす個人的主体と「戦争の記憶」のダイナミズムを考えるうえで、非常に有益なものを含みこんでいる。共同体性への単純な「帰属意識」への回帰を絶対的な条件としない主体にとって、「リソース」の間を行き来する困難は限りなく漸減している。

### 3.3 「新しい戦争」の時代の「越境」

さらに言えば、共同体性の「狭間」に位置しながら「活動的なアイロニー」を発現している、「越境」的主体における「戦争の記憶」の表象は、「新しい戦争」と呼ばれる事象の勃興に際し、さらに変化し、密接なものとなっている。「新しい戦争」とは、かつてメアリー・カルドーがボスニア戦争をその象徴としながら、グローバリゼーションにおけるアイデンティティ・ポリティクスをその核心とした概念だが、今日はより広い意味で使用されている。その定義は論者によって様々であるが、野上[2005]がまとめている以下のような定義が最も統括的なものであろう。

いま私たちは、「紙の中」に収められたかつての戦争とは違う種類の戦争に直面しているわけです。かつての戦争であれば、大量動員があつて出征し、船上での毎日があつて帰還があり、あるいは疎開があつたり空襲体験があつたりする。集合的記憶としての「戦争の記憶」は、そのような大量動員とそれによる体験の総動員の共有（とそのなかでのバリエーション）といったかたちで粹付けられているわけです。

一方、いまの戦争は、ごく一部の人が実際に戦い、それを大部分の人が「見ている」ような戦争です。私たちが戦争体験をしているとすれば、いわば大量の視聴者の一人として戦争報道を「見る」ことで体験をしているということです。(116)

湾岸戦争や<9・11>をはじめとして、「大部分の人が『見ている』」ような「新しい戦争」において、「戦争の記憶」のあり方も変質している。僅かな直接の体験者を別にすれば、そこでは間接的に「見る」

ことで（あるいは見ないことで）得た「記憶」の語りになされるのだが、その「語り」においては、旧来の「戦争の記憶」が断片的に引用されうる（先述したリービの『千々にくだけで』はまさにその代表的な例である）。さらには「新しい戦争」に対する「記憶」の語りにおいて、先行する「新しい戦争」の記憶が召喚されることもありうるだろう。「戦争の記憶」の表象はこのように、旧来の「戦争の記憶」／「新しい戦争の記憶」／新たな「新しい戦争の記憶」が入れ子状に、あるいは順不同に喚起される事態に及んでいる。特に「越境」的主体においては、「リソースとしての歴史の参照」という営為を行うに際して、共同体性という条件付けが失効していることは明白であろう。「越境」をなす個人は「狭間」において、通時的にも共時的にも縦横無尽に共同体性を内破しながら、彼／彼女の表象を紡ぎ出すのである。

これまで述べてきたような「越境」と「記憶」の関連性は、徐々にではあるが議論が進んできてもいる。米文学者の巽孝之[2013]は、旧来の比較文学を乗り越えようとするスピヴァクによる「惑星思考」、さらにそれを推進させたワイ・チー・ディモックの「深い時間（ディープ・タイム）」といった概念を発展させながら、「時間錯誤（アナクロニズム）」と共に「空間錯誤（アナロキズム）」を提唱している(15)。まさに通時的／共時的な横断性を象徴しているキー・コンセプトであるが、これらの概念が決して特殊な担い手による表象に限ったわけではなく、一方での相対主義との間にも距離をとりながら、その表象を受け取る多くの読者＝マジョリティにとって普遍的な価値をもつものだと指摘し、その受容の素地となる理論を準備することこそが、今後、より熟議されるべき課題である。

#### 4.おわりに

本稿では、「越境」と「戦争の記憶」をめぐる交点を——既に数々の文芸表象によって指示されている現象を分析するための理論的素地を検討してきた。依然として議論すべき点が多いが、本稿のような統括的な言説を紡ぐ一方で、具体的な表象に基づいてその理論を再検討することも並行して進められるべきであろう。筆者は本稿に先行して、前述したリー

ビ英雄『千々にくだけで』、岡田利規『三月の5日間』それぞれの読解、そしてレネ／デュラスによる『ヒロシマ・モナムール』と諏訪敦彦によるそのリメイク『H story』という二本の映画の比較分析、といった三つの具象的な論文を手がけてきた。それらから見てきた課題から本稿の方針は決定されたものであるが、今後は本論で準備された理論を今一度、上記した具体的な作品論に還元し、その妥当性を検討していく予定である。

#### 参考文献

- 飴屋法水 『ブルーシート』 白水社 2014
- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths, and Helen Tiffin. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-Colonial Literatures*. London: Routledge, 1989  
（木村茂雄訳 『ポストコロニアルの文学』 青土社 1998）
- Bhabha, Homi K. *The Location of Cululture*. London: Routledge, 1994（本橋哲也他訳 『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』 法政大学出版局 2005）
- Damrosch, David. *What Is World Literature?* Princeton: Princeton UP, 2003（秋草俊一郎他訳 『世界文学とは何か？』 国書刊行会 2011）
- 秋草俊一郎他訳 「比較できないものを比較する 世界文学 杜甫から三島由紀夫まで」（『文藝』2012年春号 河出書房新社）
- エヤル・ベン-アリ 関沢まゆみ訳 「戦争体験の社会的記憶と語り」（関沢まゆみ編 『戦争記憶論 忘却、変容そして継承』 昭和堂 2010）
- Eaglestone, Robert. *The Holocaust and the Postmodern*. Oxford: Oxford UP, 2004（田尻芳樹・太田晋訳 『ホロコーストとポストモダン 歴史・文学・哲学はどう応答したか』 みすず書房 2013）
- Hallwachs, Maurice. *La Mémoire Collective*. Paris: Presses Universitaires de France, 1950（小関藤一郎訳 『集合的記憶』 行路社 1989）
- 浜日出夫 「記憶のトポグラフィ」（『三田社会学』第5号 三田社会学会 2005）
- 今福龍太 『増補版 クレオール主義』 ちくま学芸文庫 2003

- Kaldor, Mary. *New and Old wars: Organized Violence in a Global Era*. Cambridge: Polity Press, 1999 (山本武彦・渡部正樹訳 『新戦争論 グローバル時代の組織的暴力』 岩波書店 2003)
- 郭南燕編 『バイリンガルな日本語文学 多言語多文化のあいだ』 三元社 2013
- 金子淳 「はじめに」(矢野敬一他 『浮遊する「記憶」』 青弓社 2005)
- 片桐雅隆 『過去と記憶の社会学 自己論からの展開』 世界思想社 2003
- 川上未映子・多和田葉子 「からだ・ことば・はざま」(川上未映子 『六つの星星 川上未映子対話集』 文藝春秋 2010)
- 木内徹他監訳 『世界文学史はいかにして可能か *New Literary History* Vol.39 No.3 Summer 2008』 成美堂 2011
- 目取真俊 『沖縄「戦後」ゼロ年』 NHK 出版 2005
- 宮田文久 「リービ英雄『千々にくだけて』を読む 『越境文学』の可能性」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第13号 日本大学大学院総合社会情報研究科 2012年7月発行分)
- 「歴史の言説『断絶による継承』 『ヒロシマ・モナムール』と『H story』」(同2012年11月発行分)
- 「『内なる越境』と『断絶による継承』 『三月の5日間』をめぐる」(同2013年2月発行分)
- 「『越境』と『戦争の記憶』序説 現代日本(2001-2011)における表象の考察のために」(同第14号 2013年7月発行分)
- 長畑明利 「母語の外へ 『ディクテ』のエクソフォニー体験」(池内靖子・西成彦編 『異郷の身体 テレサ・ハッキョン・チャをめぐる』 人文書院 2006)
- 永岡杜人 「言語についての小説——リービ英雄論」(『群像』2009年6月号 講談社)
- 西成彦 『移動文学論[II] エクストラテリトリアル』 作品社 2008
- 野上元 「『戦争の記憶』の現在」(矢野敬一他 『浮遊する「記憶」』 青弓社 2005)
- 『戦争体験の社会学 「兵士」という文体』 弘文堂 2007
- Nora, Pierre. *Les Lieux de Mémoire*. Paris: Gallimard, 1984 (谷川稔監訳 『記憶の場 フランス国民意識の文化＝社会史 第1巻 対立』 岩波書店 2002)
- 沼野充義 『W文学の世紀へ 境界を越える日本語文学』 五柳書院 2001
- 『徹夜の魂 亡命文学論』 作品社 2002
- 岡田利規 『三月の5日間』 白水社 2005
- リービ英雄 「混血児のごとく」(『日本語の勝利』 講談社 1993)
- 『日本語を書く部屋』 岩波書店 2001
- 『千々にくだけて』 講談社 2005
- リービ英雄・多和田葉子 「越境のことば 『ドイツ』と『日本』のあなたへ」(リービ英雄 『新宿の万葉集』 朝日新聞社 1996)
- 笹沼俊暁 『リービ英雄—「鄙」の言葉としての日本語』 論創社 2011
- Scott, Christopher D. *Translator's Introduction*. (Levy, Hideo. *A Room Where The Star Spangled Banner Cannot Be Heard*. New York: Columbia UP, 2011.)
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *Death of a Discipline*. New York: Columbia UP, 2003 (上村忠男・鈴木聡訳 『ある学問の死』 みすず書房 2004)
- 管啓次郎 『オムニフォン—〈世界の響き〉の詩学』 岩波書店 2005
- 巽孝之 『ニュー・アメリカニズム 米文学思想史の物語学』 青土社 1995
- 『モダニズムの惑星 英米文学思想史の修辞学』 岩波書店 2013
- 多和田葉子 『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』 岩波現代文庫 2012
- 『言葉と歩く日記』 岩波新書 2014
- 吉見俊哉 『ポスト戦後社会 シリーズ日本近現代史⑨』 岩波新書 2009

(Received: May 31, 2014)

(Issued in internet Edition: July 1, 2014)